新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.66
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2006年04月09日

report 01

フェンスを外し水辺にふれたい沼垂小児童の願い

通船川栗ノ木川下流再生市民会議副会長　星島　卓美

5年ほど前から、沼垂小学校5年生が学校の直ぐ脇を流れる栗ノ木川の環境問題について学習のお手伝いをしてきた。

川辺の野草や水質調査、なぜ川の水が茶色いの?、などなど問題が次々に出た。そこで家の人から聞いてくるように宿題した。家族と問題解決を図るコミュケーションが必要と考えたからである。お年よりの話しから、こんな話しが伝わった。若い頃は、水はきれいで夏は水浴びしたり、魚を釣って食べたり、洗濯をしたり、野菜を洗ったり、舟(板合わせ)で市場に農産物を運んだり、生活には欠かせない便利な川だったんだよ。

そうだったんだ(教室に広がった声)今でも魚がいるか調べてみよう。(全員賛成の手)釣り大会をした。初めての経験で最初は、釣れなかったが、コツをつかむと面白いように釣れた。フナ・ハヤ・ウグイなど子ども達は大喜び、お年寄りから聞いた話で釣った魚を2～3日水道の水で飼って食べたという子どもが現れた。教室中は大騒ぎ、食べた子どもは「旨かったよ」と平気な顔…。

そして、気掛かりな話しになった。川の対岸一面に張られているフェンスに気付いた。昔の人は川辺を上手に利用したからゴミはなかったと聞いたけど。それならフェンスを外し、子どもも大人も水辺に安心して近寄れるようなったらいいね。

その思いを住民に発表した。それを聞いた住民が、栗ノ木川を皆に見てもらおうと始めたのが、栗ノ木川さくら祭りである。

新潟水辺の会は乗船体験(板合わせ)・万代高校(カヌー)水辺の賑わいを演出。1回目は約3千人、2回目は約5千人、そして子ども達は一部でもフェンスを外したいと参加者に訴えた。

2006.3.4 小学生も参加しての整備作業

熱意に行政も動いた。今年、遂に実現します。「危険と言う人もいます」子ども達にも危険を十分認識させ、大人も見守るなかで、ビオトープ、船付き場がモデル的に30mほど完成します。手伝う日を決め水辺に近づく階段づくり、傾斜則面の芝はり、子ども父兄、住民、大勢の人がお手伝いにきた。

4月23日(日)、栗ノ木川さくら祭りには完成予定。子どもと住民の連携記念イベントは見事に成功した。

追記:栗ノ木川の舟着きに呼応して通船川中流左岸大形地区でも舟着きのある親水護岸整備が検討されています。栗ノ木川舟着きから出て通船川舟着きへ新しい船旅が可能になります。楽しみですね。

■水辺レポート

report 2

他門川再生研究中間報告

他門川再生研究は、`04 ～ `06 年の 3 年間で NPO 法人全国水環境交流会の受託した内閣府の「自然共生型流域社会づくりの市民研究」の全国で 3 カ所のうちのひとつとして助成を受けて始まっています。水辺の会発足当時の「他門川再生提案」の研究が再スタートしたわけです。その 3 カ年の中間年と言うことで中間発表を今年 1 月 29 日 (日) に代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターに相楽、石月、加藤、上山の 4 名で発表に行って来ました。

発表風景

NPO 全国水環境交流会 研究会主催による「官民連携による自然共生型社会構築に関わる検討」(水環境保全型社会形成に関わる調査) がこの発表会の正式名称であり、助成対象プロジェクトは以下の 3 事業です。

1. 石狩川流域における連携推進のためのシステムと施策の社会実験（NPO 法人水環境北海道）
2. 信濃川流域における他門川再生による水都新潟の再生とその市民事業化の検討（NPO 法人新潟水辺の会・他門川再生研究会）
3. 筑後川流域における流域エコツーリズムに関する社会実験（NPO 法人九州流域連携会議）

この研究は上記 3 プロジェクトの支援と言うよりは、先進的取組みに対して全国展開できる普遍的回答を引出すことにあり、社会実験であると言えます。流域というスケールでのトータルな環境の再生を考えていく上では現在様々な課題があります。人間社会が生活・経済基盤を中心に流域整備を進めた結果、本来良好な環境を併せて提供してきた流域の環境とのバランスがくずれつつあります。これらをバランス良く調和させていくために、生物生息や水環境、生物循環、市民社会意識、望ましい環境共生型都市像。これらについてビジョンを作成しそれに向かってモデル化した時に、どのようなシナリオが描けるのか、どのような施策や活動の組み合わせによってどのような状態が実現できるのか、費用対効果や生活にどのような影響を与えるのかについて議論を深めることにあります

このような視点から他門川再生プロジェクトの中間報告が行われました。昨年度の 5 回の活動のなかで 9/17 に木揚場教会を会場にしてソウル市から関係者をおよびして開催されたシンポジウム「ソウル市の都市河川清渓川に学ぶ」は昨年度の最大規模の活動であると同時に学ぶべきことが多々ありました。市民参加の手法、行政のリーダーシップ、交通計画、整備手法等今後の私達の活動に生かせる点が多くありました。新年度は完成された清渓川再生プロジェクトを実際に現地で見学し関係者からのヒアリング等が行われる予定です。また最終の今年 1/22 には「他門川周辺の歴史を語ろう」と歴史研究家の基調講演と近隣住民からの当時の情報提供が行われました。新年度暖かくなったら現地にて近隣住民とのウォッチングなどを行いたいとの要望もあり、これらを通して市民のなかに他門再生の気運を高めて行く取組みが求められています。

新年度は他門川再生提案模型等を市民に提示すると共に、再生された場合の新潟市の自然共生都市像、市民生活の変化、商業の変化、他門川による水運の復活を含めた都市交通の変化、防災機能の変化、ビジネスモデルの提案等これらを総合的に提案し市民のなかに他門川再生に気運を盛上げていくことが必要であると考えます。

上山　寛

report 03

緊急発信「萬代橋東橋詰めに、高層マンション建設計画が進行中です！」

萬代橋東詰め、万代二丁目4番(キリンビアホール南側)に、19階建てのマンション(アーバンプレイス萬代橋、66.66m、84戸)の建設が、既に建築確認は下り、協定書の締結を待って近々着工予定です。また、二丁目3番(4番の南側のブロック)に、万代地区では突出した24階建てのタワーマンション(アデニウム萬代橋タワー、85.24m、133戸)の建設計画が進行中です。こちらは近隣関係者への建築説明会の段階です。また更に、キリンビアホールとその東側の駐車場の跡地にも、高層マンションが建設されるという噂です。

とうとうと流れる信濃川、そこにかかる盤石の萬代橋、市民の憩いの場ともなっている両岸のやすらぎ堤・・・これらの景観は新潟市民の宝です。また萬代橋は国の重要文化財の指定も受けました。釈迦に説法になりますが、これら萬代橋周辺の景観を守り永く後世に伝えていく義務があります。しかし本当に恥ずかしい話ですが、万代橋をはじめ新潟の古い町並みや景観の保全について、これまで他人任せで、今回近隣に高層マンションが建つことになって、ようやく景観保全の重要性に気づきました。

全国で同様の問題が多発していることも知りました。「景観法」なるものが制定され、景観保全に社会が大きく動き出したことも知りました。何よりも心強かったのは、新潟市において既に5団体によって万代橋景観フォーラムが構成され、「萬代橋景観宣言」としてまとめられ、景観法の下で私達がこれからすべきことが明記されていることでした。

一方、市役所に何度も足を運び経過や要望などを文書の形でも提出してきましたが、ともすれば近隣者のエゴと受けとめられかねない感触でした。そこで私達は、組織化して広く賛同者の協力を得て、市民運動として展開していくしかないことを痛感するに至りました。

このようなことから、「萬代橋周辺の景観を考える会」を立ち上げる準備中です。当初は「萬代橋周辺の景観を考える東橋詰住民の会」として近隣者を中心に設立します。趣意書、活動計画と会則を整えました。最終活動目標を、「景観法を活かした新潟市都市景観条例の改正」とし、「萬代橋周辺地区を都市景観形成地区あるいは高度地区と地区指定する」「建築物の高さおよび形態・意匠の規制を行う」としています。

19階建ての建築説明会の前に、事の重要性に気づくべきでした。しかしこのまま何もせずに19階建てが着工されれば、これが既成事実となり次々により高いマンションが建つことは明らかです。事は急を要します。皆さまの知恵と協力とを急ぎ切望いたします。

私達の作成した２棟建設後の合成写真

「萬代橋周辺の景観を考える会」発起人会委員
万代グレースマンション管理組合法人
副理事長　杉山 道男（寄稿）

■水辺レポート

report 4

トキの野生復帰に向けた川づくりワーキング会議

佐渡地域振興局が主催する標記の会議の構成員として、新潟水辺の会を代表して参加してきましたので、感想も含めて報告します。

この会議は、2015年頃を目途に60羽程度のトキを佐渡の自然の中に放鳥するという環境省や県の方針を受けて、河川管理者としてどのような川づくりを行うかを検討するもので、第1回はこの会議の設立趣旨や、佐渡の河川や流域の特性などに関する議事、第2回は中国での野性トキの生息環境や、野性復帰に向けた川づくりの目標などについて、第3回は河川整備にあたっての定量的な目標と対象各河川の整備内容、第4回は具体的な整備方法や段階的な整備計画などいついての検討を行いました。

ワーキング会議そのものは、事前調査や分析結果に基づいた提案を基にして審議され、構成員からの提案も取入れる形で修正・補強されながらすすめられました。

この間私が主張したことは、

1. トキの放鳥を目前にして緊急性の高い川づくりを優先すべきであること。
2. 新たな事業を展開することも必要だが、現在実施されている事業の拡充や環境対策・地域支援対策の具体化を図るべきではないか。
3. トキの採餌場(ビオトープ)を作ることは、ルーズな自然環境を作ることにも通じるので、整備後の維持管理が不可欠となる。地元住民との連携体制が整わないとこのような環境を維持することは困難なので、このことをしっかり検討する必要がある。

などの点です。

与えられた紙面の中で、個々の問題について詳述することはできませんが、この会議も含めて、各種の計画や議論のなかで感じることは、佐渡の棚田や里山をトキが生息していた当時のように復元するという課題に正面から立ち向かうのではなく、意識的に避けているような傾向が窺えることです。

私は、過疎集落の荒れ果てた里山(棚田も畑も山も沢も)を地域の住民の手によって蘇らせることが、「トキと共生する地域社会」の確立や「都市生活者との交流(観光)」を促進させる基本的な命題であり、ここにトキ放鳥に関する政策的・技術的な課題が集約されていると考えています。

最後までトキが生息していた、
小佐渡・前浜地区の放棄田と丘陵山地

つまり、何のために野性絶滅種のトキを移入して野に放つのか、棚田や里山の自然回復にあたる集落や、米の有機栽培が求められる農家に対してどのような財政支援を行い、佐渡の活性化にどのように繋げていくのか、という肝心な問題を先送りして、個々の省庁関連の施設整備を優先させ、困難な問題はボランティアに依存するようなやり方では、いつまでたっても佐渡の空にトキは舞うことができないのではないかと心配です。

私の勝手な思い込みかも知れませんが、何よりも、さまざまなトキ野生復帰プロジェクトの中に、新生佐渡市のイニシアチブが感じられないことが残念です。

トキと共生する地域社会をつくり元気な佐渡を取り戻そうという、壮大な市民運動の展開のために、行政や市民組織の縄張り意識を捨てて力を合わせるべきだと思います。

石月　升

report 5

中ノ口川航路探索報告と大河津さくら浪漫舟の旅へのお誘い

去る3月15日に信濃川ウォーターシャトルは、ベアトリス号による初めての中ノ口川航路探索を行ないました。

ウォーターシャトルはこれまで、信濃川本川は、平成14年12月に長岡大橋手前まで、平成15年2月には小阿賀野川を満願寺閘門まで遡上し、航路探索を行なったことがありますが、中ノ口川は深度が浅く、航行は困難であると思われていました。

2006年3月15日　中ノ口川航路探索の様子

毎年6月初めに行なわれる白根の大凧合戦の際に、新津市方面から6隻のコーレンボーが凧合戦会場に集結し、川岸に係留され観覧桟敷となるという情報を入手し、コーレンボーが遡上できるなら、ウォーターシャトルも大丈夫では？ということで急遽航路探索を実施した次第です。

結論から言うと、白根までの遡上は可能ですが、途中の中塩俵にある古い木造橋の橋脚の間隔が約6mと狭いため、通過に困難を伴うことがわかりました。

したがって、新潟市内からお客様を乗せて凧合戦見物に行くのは、この木橋の架け替えが実現してからのお楽しみということになりそうです。実際にはウォーターシャトルよりもひとまわり大きいコーレンボーが通航しているのですが、かなり熟練を要するようです。

さて、中ノ口川を航行しての凧合戦見物は将来のお楽しみですが、今年も信濃川を約50km航行する「大河津さくら浪漫舟の旅」を4月22日(土)に実施致します。

川を50km以上もお客様を乗せて舟が航行するのは、日本ではこの信濃川だけです。すなわち日本最長の川の舟旅ということになります。

毎回、水辺の会の大熊会長にご乗船いただき、川案内や川談義をしていただいているだけでなく、昨年は途中の大島頭首工から蒲原大堰の間で、篠田新潟市長と森長岡市長にご乗船いただき、両市長による船上対談も行なわれました。途中では、この大島頭首工と蒲原大堰で閘門による水位調節を体験できる他、最終目的地の大河津では、4m以上もの高低差を上下する大河津新洗堰閘門も乗ったまま体験することができます。御影石を張った城砦のように壮麗な閘門が、舟の通過のために実際に操作されるのは、年にほんの数回、長岡まつりの大花火大会のため、コーレンボーが遡上、流下するときに限られます。船客として体験できるのは、この「さくら浪漫舟の旅」だけとなります。

途中では桜や桃の花が美しく咲き、残雪を抱いた山なみと共に、越後平野の春を満喫することができます。新潟駅発着の連絡バスもご用意していますので、大河津へ上るもよし、逆に下って柳都新潟へ舟で向かってもよし、どうぞ春の船旅を半日のんびりとお楽しみ下さい。

信濃川ウォーターシャトル（株）
栗原　道平

■水辺レポート

report 4

雨のめぐみから10年

□ 雨水タンクの活躍

1996年9月,自宅にアルミカーポートを設置した時に,雨を貯留して,それをトイレや散水に利用する施設を作りました。雨を貯める施設として浄化槽を使用することにして新しい浄化槽を地下に埋設することを業者に頼み,アルミカーポートからの雨樋を浄化槽(以降「雨水タンク」という)に接続しました。雨を集めるカーポートと雨水タンクは次の表のとおりです。

	施設名	能力・規模
雨を集める施設	車庫(アルミカーポート)	幅5m×奥行き5m=25m^2
雨を貯める施設	雨水タンク(浄化槽)	約2m^3
雨水送水施設	ポンプ(浅井戸用)	21リットル/分-12m(130W-100V)
雨水の利用	トイレ及び散水	トイレ1箇所,散水栓1箇所

□ 利用からこれまでの感想

1. 雨が2週間ほど降らないと雨水タンクが涸れる。1年に1週間から長くて2週間は雨水が利用できない。その時は水道を接続しているトイレを使用する。(トイレに1日,約113リットル※使用している。※雨水利用できない日を考慮して。4人家族で28L/人)
2. 雨水タンクを掃除すると,底に黒い粒子が沈殿している。雨は大気の微粒子(エーロゾル=aerosol)を核に雨粒になることから,この黒い粒が自然活動のものか,自動車などの人間活動に伴って放出された汚染粒子なのか調査したいと考えています。「ディーゼルエンジンの排気物質など,大気汚染に関する研究をされている会員がおりましたらご指導お願いいたします。今年の夏頃,雨水タンクを掃除するときに粒子を採取する予定です。」
3. 除雪した雪を雨水タンクに投入するが融け難い。しかし,除雪と雪の有効利用で一石二鳥。

トイレに使用した雨水の量は今までに380m^3(380,000L)を超えました。雨が降らないと,雨水タンクの中を覗いては,空を見上げています。晴れの日も雨の日も楽しみになっています。雨水をトイレに使用できないときが,年間10日くらいあったので,上水道は10,600L(=113L×10日×9.4年)くらいしか使っていないと思います。

2階から見た,車庫(手前)と雨水タンク
(中央,黒い円が点検孔)

不要になった浄化槽は,中を消毒洗浄して底に穴を開けて砂などを入れ,地面に出ている蓋などは撤去するため,状況に応じた処理費が必要になります。雨水の流入設備や貯めた雨水の利用をどのようにするかで費用が掛かりますが,雨水の有効利用と雨水の排出抑制による環境対策に貢献できます。浄化槽の再利用,雨水を貯留したいと考えているようでしたら,行動を。お手伝いしたいと思います。

長井一義

今までの報告は本誌Vol.39,46をご覧ください

report 11

半世紀ちゃん炬燵（こたつ）舟に乗る

母の胎内から滑り落ちそうになるのを必死に耐え、無事産声を上げてから50年が経った。テレビで明石家さんまさんが使っていた“半世紀ちゃん”という言葉が気に入り、以来何の断りもせず使わせていただいている。しかもこの先一世紀になるまでこの呼び方で行こうと思っている。

さて、去る2月18日松江の堀めぐりをしてきた。内堀のみの遊覧だったが、人も羨む炬燵舟だ。

松江市観光文化課発行のパンフレットには“水の都 松江”と記されていた。

世間話をしながら舟を進め、武家屋敷や小泉八雲記念館のある伝統美観地区に指定されている北堀沿いの通り塩見縄手を過ぎる頃になり、山を掘って作ったお堀は日本でもここ松江にしか無いとの説明があった。

お城側の方を見てみるとやぶ椿が沢山生えており、反対側の民家の方には昔使っていたらしい石段や排水路などが残っていた。

また、汽水湖である宍道湖から水を引いているこの堀には淡水魚と海水魚が生息しており、堀自体の深さは3mだが水深は浅い所で80cm位しかないなどの説明もあった。

何箇所か橋をくぐると本来の石垣と補修後の石垣が向い合せになっている所があった。もともと有った方は大小様々な大きさの石で組まれており、ずっと見ていても飽きない。が、補修した方の石垣は単調で見ているうちに目がチカチカしてきた。

また改修後の堀の幅は一部ではあるがずーっと狭められていた。遊覧最後の橋は舟の屋根を下げなければならない程低くその幅も舟がぎりぎり通れる程度で、ぶつからずに通れることが殆ど無いそうだ。手動で手伝いたいくらいだった。そうこうしているうちに船着場に到着した。

橋の下をくぐるときみんながお辞儀する奥ゆかしい堀割船
提供：相楽 治

面白かったので外堀の方も廻りたいくらいだった。

ただ後々まで気になったのは、北堀沿いの通りの様な景観がもっと広がればステキなのにと思ったが、松江城のボランティアガイドさんの話だと島根ふるさと館の一帯は再開発の話が持ち上がっており、そうなると3階建ビルなどが出現する可能性も出てくるらしい。残念‼

戸枝 邦子

佐潟の絵を寄贈いただきました。

先日会員でもある街角絵師の長谷川 久彦さんより、佐潟の水彩画を寄贈いただきました。

初冬の晴れ間に広大な水面の向こうに角田山を臨む開放感と自然の豊かさが実感できる作品です。

絵は額装し、事務局に飾らせていただきました。

皆様お立ち寄りの歳にごらんいただけると幸いです。

■水辺レポート

アメリカのNPO「チェサピーク湾財団」訪問記

report 8

今回、アメリカのNPOを訪問するツアーがあると知り、参加してきました。このツアーは新潟NPO協会が主催し、ペンシルバニアNPO協会(PANO)の協力のもと、新潟県内のNPO関係者12名が2006年1月4～11日、ペンシルバニアの州都ハリスバーグを中心にNPO団体や学校などの施設を訪問しました。

サスケハナ川にて

ペンシルバニア州はアメリカの北東部、ニューヨーク州の南に位置し、フィラディルフィアやピッツバーグがある歴史のある州です。ハリスバーグはその両市の中間に位置し、大河サスケハナ川が市内を流れており、川幅は500m以上あります。雪解け水による洪水で1970年には橋が流されたり、2年前も、橋桁によって氷が止められ、雪解け水が市内にあふれたそうです。その後、住民は地下室を作らないなどの対策をしています。なお、有名なスリーマイル原発もこの近くの中洲にあります。

アメリカでは財団も含めてNPOと呼ばれていますが、「チェサピーク湾財団」の事務所はそのサスケハナ川のほとりにあり、最高のロケーションです。他にクーパーズタウン(NY州)、アナポリス(ML州)に事務所があります。早速、事務所裏の土手に上がり、専門スタッフから説明を受けました。

サスケハナ川は延長710km、全米7番目の川で、大西洋へ流れ出る湾の名前がチェサピークです。財団はSave the Bayを合言葉に流域復活を目的に活動しており、会員数10万人、専属スタッフ165名、年間予算20億で、ほとんどが企業と個人からの寄付でまかなわれているそうです。水辺の会の400倍です。機関誌、ホームページ、パンフレット、バッジ、ボールペンやTシャツなど情報発信のツールが充実しています。

目標とする具体的な方策は

1. 緩衝帯としての森林整備
2. 湿地帯の保全
3. カキや水生生物の保護であり、復元プログラムとして1.Do it(行う) 2.Teach it(教える) 3.Learn from it(学ぶ)

をあげています。特に「森は小川の最高の友達」として、小川の復元に力を入れています。農業者や地主の協力のもと、小川の整備だけでなく、牛から小川を守るために柵の設置なども行っています。

主な活動内容は子供たちによる水質調査、学校の先生対象の教育プログラム、市民参加による水辺活動などで、問題点も行政との協働方策や他団体との協力関係づくり、治水と景観の調和など似たようなものでした。ただ、違うのは財政規模で、アメリカではNPOに助成金を出すための財団が数多く存在するなど、社会基盤の違いはありますが、ホームページ上で寄付できる仕組みや寄付者に対する説明責任など、我々も参考にすべきことがありました。

詳しくは以下で検索してください。

http://www.cbf.org/

森本 利

report 13

信越放送ラジオ番組「武田徹のつれづれ散歩道」長田健氏と鮭談義

2月11日、長野県水辺環境保全研究会の長田健さん(昨05年12月17日の「サケシンポジウム」にパネラーとして参加)の要請を受けて、信越放送のラジオ番組にでてきました。

「武田徹のつれづれ散歩道」は20年以上も続く人気長寿番組で、毎週土曜日の9時から12時間まで放送され、長田さんは10時からの「信州季節ごよみ」のメインゲストを放送開始から務めているそうです。因みにパーソナリティーの武田徹さんと番組担当の塩入美雪さんも水辺環境保全研究会の会員だということです。

番組は、長野と新潟の水辺の会のラジオ交流会といった雰囲気ですすめられました。

私は「新潟水辺の会は、NPO発足時に“考える”ことをほどほどにして、行動する会に変身しました。そして、日本海から長野県境まで責任を持てサケを送り届けようと決めたので、長野の皆さんは“良く研究して”上田や松本にゴールを定めて新潟からのサケを遡上させてください」と呼びかけてきました。

越中、越後、信州は、平安時代から江戸時代にかけてサケの生産地として全国に知られ、朝廷や幕府へ献上された記録もあり、昭和初期には少なくとも新潟と長野の信濃川(千曲川)でそれぞれ年間70トン程度の漁獲量があったこと。

昭和10年代から始まった水力発電事業によって、川がせき止められ、流量が減ったため、サケの遡上や下降が出来なくなって急激に漁獲量が減り、昭和20年(1945)には西大滝ダムから上流には、ついに一匹も上らなくなってしまったこと。長野県は昭和54年(1979)から21年間続けてきた「サケ復活対策事業」を平成11年度(1999)で廃止したこと。等の経過を話し合いながら、

1 川があるのに魚が上ったり下ったり出来ないことを、あたりまえだと考えるのはやめよう。
2 人間がサケの遡上を止めたのだから、人間の力で再び遡上させることが出来ることを信じよう。

3 本当にいい川とは、魚が自由に行き来し、人間が生き生きと交流している川だということを確認しよう。
4 サケの川を蘇らせるために、新潟・長野両県の人々に広く呼びかけながら運動を発展させよう。

と語り合い、長野の皆さんに呼びかけてきました。

楽しいトークショーでした。

石月 升

ホームページ、メールのアドレスが変わります。

事務局のIT環境変更により、ホームページとメールのアドレスが以下のように変更になります。

ホームページ
http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/
事務局メールアドレス
mizubenokai@plum.plala.or.jp
これまでのホームページアドレス、メールアドレスは4月末を目処に使えなくなります。

「2006 三人委員会・いいやま哲学塾」のおしらせ

大熊 孝

哲学者の内山節 (立教大学教授)、環境倫理学の鬼頭秀一 (東京大学教授) と河川工学の私・大熊がつくる三人委員会というものがあります。何で哲学や環境倫理学に河川工学が加わるのかよく分かりませんが、なんとなくそういうことになっています。

この三人委員会による哲学塾が 5 月 19 日 (金) から 21 日 (日) にかけてブナの新緑の美しい長野県飯山市の「なべくら高原・森の家」で行われます。この哲学塾は静岡県掛川市で 5 回行われ、飯山で夏・秋・冬の 3 回行われてきました。今年は、飯山で最後の春の哲学塾です。

テーマは「ふるさとはいつ生まれたのか―国民国家を問いなおす―」です。

童謡に「故郷」(1914 年発表) というのがありますが、これは飯山市の少し西南にある長野県豊田村出身の高野辰之 (1876-1947) が作詞したものです。この歌の意味するところを、近代国家の成立過程の中に位置付け、「ふるさとはいつから存在するのか ?」という観点から国民国家を問いなおしてみよう、というものです。三人の話す内容は下記の通りですが、私は雪の降る可能性が大きな冬に全国一律にセンター試験を実施できる体制を象徴として、「近代国家」の成立過程と土木の関係を眺めて見たいと考えています。

皆さんの参加を期待します。

テーマ :「ふるさとはいつ生まれたのか―国民国家を問いなおす―」
場所 : 飯山市なべくら高原・森の家
日程 :
5 月 19 日 13:00 ～ 17:00 大円卓談義
　内山節「江戸の都市思想と近代国家」
　鬼頭秀一「ふるさと・稲作・国家」
　大熊孝「センター試験と土木」
　質疑と討議
　18:00　交流会
5 月 20 日　9:30~17:00 春の山里を舞台に徹底討論
5 月 21 日　9:30~12:00 いいやま哲学塾まとめ
　13:00~15:30 残雪とブナ林のオプショナルツアー
参加費 : 約 24,000 円 (宿泊・食費含む。)

申込み先 : 〒 389-2292(住所不要)
飯山市教育委員会事務局内「いいやま哲学塾」係
電話 0269-62-3111　　FAX0269-62-5990
Web:www.city.iiyama.nagano.jp/tetugaku/
締め切り :4 月 26 日

入会案内

この会は、遊び半分・真面目心半分で活動しています。

ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年 :1987 年 10 月 15 日■目的 : 水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。■代表者 : 代表 大熊 孝 (新潟大学工学部教授) ■会員数 : 個人 216 名・法人 11 団体 (2006 年 4 月現在) ■活動 : 水辺シンポジウムの開催 / 水辺ウォッチング / 会報「新潟の水辺だより」の発行 / 水辺環境整備に関する学習会 / 長野県富山県の水辺グループとの交流会 / 通船川、佐潟の調査・研究 etc. ■年会費 : 個人会員一口 1,000 円を 2 口以上、賛助会員 (法人など) 一口 5,000 円を 2 口以上

入会申込書　　年　　月

フリガナ 氏　名		男・女 歳
特技や 水辺への想い		メールアドレス
住　所	〒 (　　)　－	
職　業		
勤務先	〒 (　　)　－	

注）紙面の都合上、縮小しています。
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

●事務局からのお願い
インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

●発　行 : 特定非営利活動法人　新潟水辺の会
●事務局 : 〒950-2264新潟市みずき野4-7-15
大熊 孝　方
Phone　025-264-3191
F a x　025-264-3260
ホームページ
ttp://www17.plala.or.jp/mizubenokai/
メール　mizubenokai@plum.plala.or.jp